

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第五十六回）

「大伴旅人・望郷の歌」

・万葉集には、旅に出て故郷を思う歌が多くみられるが、当時、地方への赴任を余儀なくされた官人たちの中で、最も多く望郷歌が詠まれたのは大伴旅人・山上憶良が中心となって形成された「筑紫歌壇」であり、中でも最も悲痛な望郷の歌をのこしたのは大宰府帥（長官）そちだった大伴旅人だったといわれる。

《二》天平元（七二九）年後半（七夕の頃）の頃、旅人は九州の大宰府にいて都に在る親しい人に都を恋い焦がれたらしく次の歌をおくっている。

1) たつ 龍の馬も ま 今も得てしか あ あを

によし 奈良の都に ゆ 往きて来むた こ

め 卷五―八〇六 作者…大伴旅人

（解説）

遠く離れた美しい奈良の都にいつて帰るために、天空を駆ける神通力を持った龍のような馬を今すぐにも欲しいものだ。

「龍」は麒麟・鳳凰・亀とともに四霊の一つであり、青龍は白虎・朱雀・玄武とともに四神の一つであり、特に中国では尊ばれ、強く神聖な龍は天子や君主の象徴ともされた。常に深淵に住み、雷雨とともに昇天し、自由に空飛ぶ神通力を持つとされている。

・ 日本国語大辞典には龍は想像上の動物。体は大蛇に似て、背に鱗（うろこ）があり、四足に各五本の指、頭には二本の角があり、顔が長く耳を持ち、口のあたりに長いひげがあり、喉下（のどもと）に逆さ鱗を有する。姿は鹿の角、馬の首、蛇の尾、魚の鱗を持つ中国の伝説上の生物といわれる。

うっつ あ
2) 現には 逢ふよしもなし ぬば

よる いめ っ
たまの 夜の夢にき 継ぎて見えこ

そ 卷五―八〇七 作者…大伴旅人

（解説）現実には逢う手立てもありません。どうか夜の夢にだけでも続けて現れてください。

・前記の二首からは空を飛ぶという龍馬を得てほんの一刻でも良いから都に帰りたいという彼の悲痛な思いが伝わってくる。

≡≡≡ 都に在る親しい人からの「答ふる歌二首」

たつ ま あ もと

1) 龍の馬を 我れは求めむ あお

みやこ こ ひと た

によし 奈良の都に 来む人の為

に 卷五―八〇八 作者…未詳

(解説) あなたがおつしやる龍の馬、その馬を私はきつと探し出しましたよ。奈良の都に飛んで来たいとおつしやるお方のために。

ただ あ

2) 直に逢はず あらくも多く

しきたえ まくらさ いめ み

敷栲の 枕去らずて 夢にし見え

む 卷五―八〇九 作者…未詳

(解説) じかにお逢いできない日がたくさん重なってしまつて…仰せのよう、おやすみになる枕辺をはなれず、夜ごとの夢にお逢いしましょう。

(参考文献) 前田淑著「大宰府万葉の世界」奈良県立万葉文化館「よるずは」、日本国語大辞典

伊藤博著「万葉集釈注」他

(写生地)

・九州・大宰府から都に在る親しい人へ歌を送った大伴旅人が大宰府帥(長官)として赴任していた大宰府政庁は九州全体を治める役所「大宰府」で

7世紀後半から奈良、平安時代を通じて九州を治め、わが国の西の守りとして防衛を、また外国との交渉の窓口として重要な役割を果たしてきた。

- ・現在、大宰府政庁跡の中心には往時の大きさを偲ばせる立派な建物の礎石が残り、そこを中心に門や回廊跡などが復元され、史跡公園となっている。その公園風景を描く。(杏花)



(所在地)・福岡県太宰府市観世音寺4、

・西鉄・天神大牟田線「都府楼前」駅下車、徒歩約15分